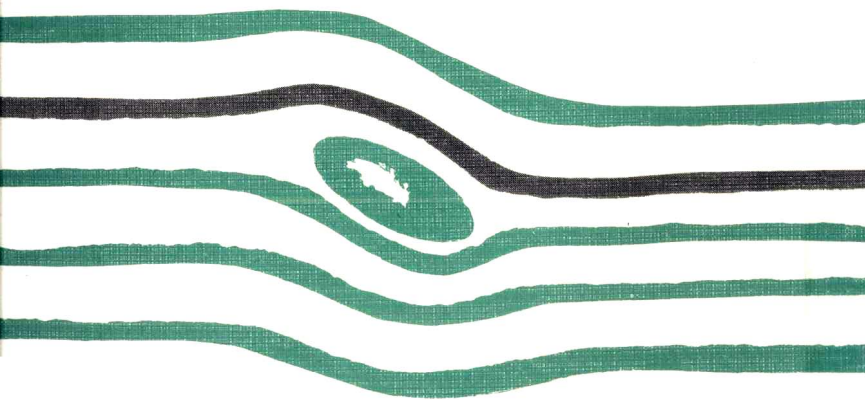


古代文学と民話の方法

駒木 敏著

笠間選書 119



笠間書院

駒木 敏 (こまき さとし)

1942 年，福島県に生まれる。

同志社大学文学部・同大学院文学研究科修士課程に
学ぶ。聖徳学園岐阜教育大学専任講師などを経て，現
在阪南大学商学部助教授。同志社大学文学部講師。
専攻，日本古代文学。

現住所 〒569 高槻市日吉台 7 番町 18-19

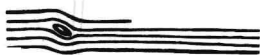
- 笠間選書119 古代文学と民話の方法
昭和 54 年 2 月 20 日初版第 1 刷発行
定価 1,500 円 — 検印省略 —
- 著者 駒木敏 ©
発行者 池田猛雄
印刷 三美印刷
製本 笠間製本所
発行所 有限会社笠間書院
〒101 東京都千代田区神田神保町 1-46
電話 03-295-1331 (代) 振替東京 1-56002
書籍コード 1391-953119-0924

古代文学と民話の方法

駒 木 敏 著



笠間選書 119



笠間書院

『古代文学と民話の方法』 目次

序章	カタリの世界観とその方法……………	五
----	-------------------	---

第一章 神話と民話の世界

第一節	荒ぶる神——日本の神性の原像……………	二三
第二節	聖なる婚姻と始祖伝承……………	四二
第三節	変身空間としての他界……………	六五

第二章 説話と民話の交流

第一節	『靈異記』説話の性格——民話性をめぐって……………	八五
第二節	『靈異記』における観音信仰説話……………	一〇五
第三節	『靈異記』と民話的基盤……………	一二五
第四節	仏神の幻影——靈験譚の一方……………	一四八

第三章 昔ガタリの方法と構造

第一節 カタリの方法——「ねずみの穴」——……………一六九

第二節 山入りの祝福——「鳥呑み爺」——……………一八三

第三節 なまけものの祝福——「のうなし小僧」——……………一九八

第四節 伝承の回路——「食わず女房」——……………二一二

第四章 民話の伝統——穀霊とマレピト——……………二二九

あとがき……………二六五

序章 カタリの世界観とその方法

一

抒情体の口承文学（ウタ）に対比することのできる叙事体の口承文学には、〈神話〉・〈民話〉・〈伝説〉・〈物語〉・〈説話〉などのジャンルがある。口承叙事体の位相はそれだけ多様なありようを示しているものであり、また、それらのジャンルの歴史的、空間的な展開や交流関係などもあいまって、これらの実体と概念とをどう繋ぎ把握するかは、今なお大きな問題であると言ってよい。

ここに、〈カタリ〉と〈ハナシ〉の術語を想定すると、口承叙事体の大きな潮流を見わたすのに有効ではないかと思う。神話や民話はカタリの本流であり、特定の共同体集団（ムレ）の生活規範として機能する様式性、抽象性に支えられた伝承体である。対するハナシ（説話）は、同様に集団を基盤にしながらも、特定の共同体の規範としてではなく、個的な人間の倫理や興味に即応するところに成立する形態であり、様式性は持たず分析的言語（日常会話体）に支えられる伝承体である。伝説は、地域共同体の歴史や自然的存在の意義を説明し保証する機能の点でカタリに近く、聖なる時を媒介とせずの日

常的な場で伝承され、かつ形式も自由である点ではハナシに近い性格も持っている。物語はカタリの方法を受けつぎつぎそれを質的に変化させ、現実の人間社会のありさまを語ることを主な性格として展開していると考えられる。

カタリの方法を基本的に決定づけるのは、「かたる」という動詞の意味からも知られるように、それが説明、説得のための言語形式としての性格を本源的に持つという点であろう。「神話」を意味するギリシャ語のミュトス (mythos) も、「元来『言葉』ないし『語られるもの』を意味したが、後世になって『神について語られるもの』を意味するようになった」と言われる。松村武雄氏は神話を生む思考法について、それは「低層民族」(神話的論理のなかに生きる人々の意——筆者註) が文学し、科学し、宗教し、哲学し、歴史しようとする心性にかかわるものとし、対象としての事物や存在を説明する形式が神話であると述べられた。⁽³⁾ コトやモノの存在を「なぜ?」と思惟し、思惟した結果の説明がカタリであるということは、「かたる」という動詞の意義と全く重なっているのである。

このことは、カタリがなぜ語られなければならないかという目的や機能にも関係してくるはずである。古代的心性においては、存在はすべて起源において決定されるのであり、起源を持たない存在は価値ある存在、真の存在ではない、と考えられる。⁽⁴⁾ やはり、「シル」という動詞が古代においては「占有・領有・支配」の意味を持つとともに「認識・精通・熟知」の意であることも、上の関係を示していると思われる。対象や存在についての根源を熟知することは、それをわがものとし支配(コントロール)することでもある。それゆえに、存在の根源を説明する形式たるカタリは、自然と社会の秩序関係や

共同体の生活を維持するための規範として働くのでもあり、集団の場で繰り返し語られなければならないのである。

規範としてのカタリは、その機能を最も有効に発揮させられるために、社会的、集団的な場において語られる。カタリの正統をなす神話や民話の、他の口承叙事体との違いを典型的に示す性格は、それが様式にのっとる類型（話型）を有していることである。カタリの類型が何によって支えられているかは一言では説明できないが、その大きな要因として、カタリが共同体の集合的意識に基づく社会的な場において語られるものである、という側面をあげることができると考える。

人間の生活には、古来、日常的世俗的局面と、威儀を正して何物かに相対するような局面とがあった。前者は、日々の生産労働を主としたケの時間帯そのものであり、後者は、そのような人と共同体の生活を根底から支える非日常的なハレの時間帯である。日常生活の円滑な進行を保証し確認する折り目としてのハレの日は、儀礼や祭の形で集約的に演出される。いわばケとハレの時間帯は、あい補いながら共同体の生活の循環を形づくっていた。そして、本来口承のカタリは、この聖なる時間帯に深くかかわっていた。祭儀の場に支えられ、その観想ないし想像力を言語によって型どってゆくところに、カタリの成立があると考えられるのである。

神話にはそのような性格が最も顕著に表われているが、一見娯楽本意のものであるかに見える民話も、その本源をたどれば、神話と同質の機能や性格を内在させていたと推定される。民話研究がその実態を掘りおこし明らかにしているように、民話が語られる季節と時間（場）を特定していたこと、特

定の語り手（ムラの長老や宗家の長）のもとに集まって享受されたこと、コトやモノの起源・教訓（生活の規範）を語ることを目的とするものが多いこと、などの点がそのことを語っている。古代における民話の実体をどのように見ずえるか、また今日の昔ガタリ（昔話）の様式性の成立をどのように見定めるかなどの問題は、神話と民話の関連をどう解くのかという基本的課題ともかわる大きな問題である。が、今日神話が生きて語られている社会においては、神話と民話の区別は混沌としていて区別しがたいこと、語られる場や語る人の意識によって同一の伝承体が神話とも民話とも意識されていること⁽⁵⁾などの事実は、わが国の神話が記紀神話として整理統合される以前の村々や国々のカタリの態様を考える場合にも、当然示唆するところがあるであろう。

河合隼雄氏は、ユング派のメルヘン研究家フォン・フランクツの考えを援用して浦島太郎型の伝承に言及されたことがあつた⁽⁶⁾が、そこでフランクツが「昔話は海であり、伝説や神話はその上の波のようなものである」というとき、心理学的に言うところの「元型的体験」（集団表象としてのモチーフ・観想と言いかえることもできる）が、特定の個的狀況と結びついて語られるものを神話や伝説と捉えていることは明らかである。逆に言えば、非個性的・等質的な常民社会（ムラの共同体）にあつては、「元型的体験」は比較的純粹なままに語りつがれるということである。神話は基本的に階級社会の産物と見なし、てよいであろうが、その意味では個性的なカタリである。わが国の古代社会でも、神話・民話・伝説が併存し互いに交流しあつていたと見なしうる⁽⁷⁾が、神話と民話は方法において共通するものを持ちながら、その基盤としての社会構成の違いによって異なつた側面をも持つているとすべきであろう。

カタリの基層觀念として抽出される「元型的体験」は、様式に支えられた類型（話型）によって表出される。三谷栄一氏は、「口承文芸の本質は様式の意味作用にある」こと、そして様式は数少ない「祖型」に還元されることを指摘しておられる。⁽⁸⁾口承叙事体の本流と見なすべきカタリ（神話や民話）は、まさに類型の意味作用を主要な機能としていたのである。このような本質は、民話が新しい現実や素材をとりこんでゆく場合にも常にカタリの様式にあてはめ類化することによってなされ、同様に神話が史実をもとに形成される場合にも、「古代人的心性の大地のなかにすい込まれて行くような仕方で変化せられ」「規範的なものをのみ保存する」⁽⁹⁾という、カタリの造型法の特徴からも確かめられるところである。

この様式性の問題は、例えば民謡がそうであるように、口誦の文学が持つ基本性である。しかしそれと共に、説話などの口承体が必ずしも民話のような話型を持たないこととの比較でいえば、カタリの方法を支えている現実的基盤とのかかわりも問題となるはずである。カタリの様式性は、口承性とともに、それを支える基盤に規定されると考えられるのである。集団の意志を表象するところのモチーフが結合され、一つの類型（話型）を形づくるというカタリの様式性は、コトとモノの起源譚として機能し、規範として意識される。そのような意味で、カタリの話型がどのようなモチーフによって織りなされ、それがどのような基盤のなかで観想されているかを図式化してみることは、カタリの文学の展開を考えてゆく上での重要な指標となるであろう。

カタリの世界において、人は自らをとりまく宇宙をどのように捉えていたのであろうか。さきほど、ハレの時間帯とケの時間帯について触れたが、そのことを空間的な位置関係に置き直してみると、前者の局面に対応する非日常的空間（他界・異郷）と後者の局面に対応する日常的次元（現世・生活空間）を指定するのは容易である。というより、ハレの時間性のなかで、ケの次元を浄化し賦活し更新させる異次元の空間としての他界が、明確なイメージとして想定されてくるのだと言えよう。かくしてハレの時空——祭儀の時と場において、生活空間とその外に広がる他界との交換がイメージされ、他界からの聖なる力（靈格・神格）の招来や現世に属する者の聖なる他界のかいま見の体験がイメージされる。カタリの世界観の基軸はそのような二元的世界観（宇宙観）であると言つてよい。益田勝実氏は「神話的想像力」のありようを、聖なる世界との交換を演出するために人々が永い「籠り」の体験をする、その籠りの中で醸成されるものである、と言われるが、カタリにおけるこのような世界観は、まさにハレの祭儀の観想とかかわりを持つものであろう。カタリは、この世ならぬカミやモノが人界に寄りきたって幸福や財宝をもたらし、また人がふとしたきっかけから他界を訪れ、特異な経験をするという類型で、二つの世界の交換を語るが、そこには典型的な二元的世界観が横たわっているのである。

例えば、海の彼方や常世の国はそのような他界である。沖縄地方のニライカナイに対する信仰は現在においてもなお具体的に人々の生活のなかで機能しているが、古事記の山幸彦と豊玉媛神話やスク

ナヒコナ神の神話、丹後風土記逸文に伝える浦島子の伝承などにも、海彼の他界が語られる。天人女房型や白鳥処女型のカタリでは神性のモノは天上界から降りてくるし、三輪山型神話や蛇簪入型のカタリでは山上ないし山中がそのような他界である。地蔵浄土型の民話やササノヲ神話の「根の国」、イザナギ・イザナミ神話の「黄泉国」などでは、地下ないし地中に重層するところに他界が想定される。聖なる他界と意識される空間は、このように天上界・山界・地下界・水(海・川)界など多様であって、また複合して表出される場合も多い。けれども、それらに共通するのは、人間の生活空間をとりまく周縁と意識される世界であることである。共同体社会における世界観は、人々の生活空間を中心として「自己完結的な小宇宙」⁽¹⁾をなしている。生活圏を一步出れば、そこは謎に満ちた未知の世界であり、また憧れを誘う世界でもある。

カタリはこの二元論的世界を基軸に、「へこちら」(生活空間)と「へあちら」(他界)との一時的な寄りあいや交換を願望的に表出する。二つの世界の交換は呪的シンボルとしての呪物や他界への結節点たる場所を通して表出されるが、その方向性が「へあちら」から「へこちら」へという形をとるところに成立するのが、寄り来るモノと地上の人間との結合を観想とする「来訪型」であり、「へこちら」から「へあちら」へという形をとるところに成立するのが、聖なる他界をかいまみることを観想とする「訪問型」のカタリである。

他界との結合によってもたらされるもの——それがカタリのテーマにつながる——も多様である。民話では一般的に富み栄えることであるが、具体的には生命力(浦島太郎の玉匣、若返りの水、宝手拭な

ど）・如意宝（一寸法師の打手の小槌・山幸彦の潮満珠潮干珠・隠れ簀笠など）・不思議な能力であったり、また結婚によってもたらされる幸いであったり、小童（とその霊力による幸福）であったり、食物や金銭であったりする。それはカタリの具体的展開に伴って種々に変化しうる要素を持っているわけである。特に結婚や小童の招来、他界からの呪宝が、民話においてはほぼ幸福と結びつくのに対して、神話にあっては出自や系譜の神聖化を意義づける形で語られたり、支配権の象徴と語られたりするの、その最も典型的な場合である。また来訪型と訪問型とでは、前者が神異のモノそれ自身の属性が人間界を幸福にするとされるのに対して、後者が訪問者自身の人格的転身にかかわる幸福を語るという違いが見られることもある。いずれにせよ、他界にかかわる属性や呪物が、地上の生活を聖化し充実させ辛いにするという観念や願望が、二つの世界の交換をイメージするカタリのテーマを規定していると思われることができる。

もちろん、他界の聖性は、肯定的な力としてのみ作用するのではない。近年とみに言及されているように、それは肯定と否定、正と負の両極の、混沌とした様相として存在する。聖なる他界に属するもののこの錯綜した「両義性」^⑫に対峙するところに祭儀やカタリの観念が定位される。他界とそれに属する霊格に対する観念は憧憬であると同時に畏怖でもある。そのような観念は、いわゆる禁忌（タブー）のモチーフとして抽象することができる。聖なる局面・ハレの場において、非日常的な世界に対応するとき、そこに禁忌の観念がつきまとうことは周知であるが、祭儀にはそれが集約的に表現される。益田勝実氏が詳述されたように、聖性に近づく神霊の来臨を演出する祭儀の中核的部分を占める

のは秘儀性である。⁽¹³⁾ カタリのモチーフとしての禁忌もまた、その順守と侵犯にかかわって二つの世界（現世と他界）の結合と乖離が語られるという点では、この秘儀の心性と同じいのである。そして、禁忌の順守と侵犯にかかわる心性は、カタリに表現される道德律や登場人物の描き分けをも左右していると思われる。

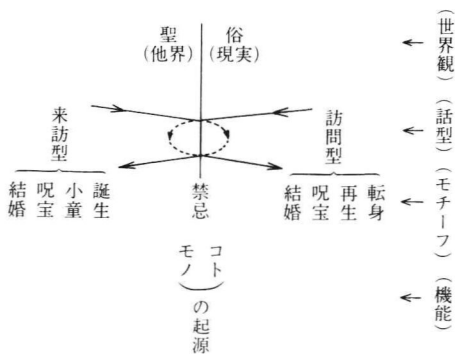
人が自然の摂理に従い、共同体のルールを順守し、禁忌の中に籠る限りににおいて、聖なる他界との交流は可能であった。祭儀は、来たるべき収穫と豊穡に対する確信的な願望に裏打ちされていたはずである。カタリが禁忌の心性を媒介項として二つの世界の結合と離反を説くことが多いのも、このことと深くかかわっている。昔ガタリの世界においてこのような道德律が、例えば二人の爺（婆）・兄弟・夫婦などを通して表出される善悪の二元的倫理として語られることは、広く知られている。それは、近世的な勧善懲悪思想をかくくすることによってより明確に定着してきたことでもあった。また、それを民衆の心を深く基定づけてきた思想（倫理）との関係で理解するときには、中世以降の仏教思想などの影響も考えてみななければならないまい。けれども、海幸山幸の神話、蘇民招来型の民話、へ因幡の白兎の大国主（弟）と八十神（兄）とのありようには、正性と負性の素朴道德律が兄弟を通して形象され、一方が他界（聖性）の祝福にあずかり他方があずかり得ないとするパターンがすでに存在している。素朴な二元論のなかに、仏教や儒教的倫理が浸透し、善悪の形がより明確化してくる関係を見ることができよう。

二つの倫理を二種類の人間の造型の中に語るこの方法は、ことがらを抽象化、一般化して表わすカ

タリの発想ともからむのであるが、二つの倫理を担い持つ人物は聖性に属するモノへの対し方を基点としてその違いをきわだたせているのである。従って、それは二種類の人物を通して語られるとは限らない。一人の人物においても、禁忌を順守する間は他界の聖性との結合が可能であるけれども、それを破るときには聖性との乖離がある。いわゆる異類婚姻型は、基本的はこの観想の中にあるといえる。聖性との結合を願望的に表出するカタリの結構は、聖性に対する現世の人間の態度を二つながら統一的に語るものである。それはまた、他界に属する聖性が正と負の両面を有し、それが憧憬であると同時に畏怖の対象でもあるという両義性にもよっている。禁忌の順守による聖性との出会い・祝福の示現は、禁忌の侵犯による聖性との離別・祝福の喪失と常に表裏をなしている。禁忌の観念を通して、他界との交換のありようを総体的に表出するのがカタリの世界であり、そこに二元的道德律の観念は分かちがたく存立しているのである。

以上に述べてきたことをあらまし図式化すると、

下図のようになるであらう。



正統のカタリは、上に見たような基盤と発想(世界観)の上にたつてその様式性をきわだたせていた。本書は、そのような視点のもとに、口承叙事体におけるカタリの方法の展開をさぐっていききたいと考える。

さて、今まで「民話」という語を用いてきたが、それは一般に「昔話」と呼ばれているものとはほぼ同じ実体を指している。「昔話」を学術語として提唱されたのは柳田国男氏であり、その主な根拠は、伝承管理者自身がムカシ・ムカシコなどの語でその伝承体を呼んでいること、従つて「民話」という訳語をわざわざ用いなくてもよいのではないか、という点にある。それは、「興味本位で語られ、信ずることを要しない」⁽¹⁵⁾ものという内容で「昔話」一般の性格を括る観点からは、妥当な術語であろう。しかし民話には、柳田国男氏が「完形昔話」と名づけ、関敬吾氏が「本格昔話」と名づけられた伝承体と、「派生昔話」(柳田国男)と名づけられる系統の伝承体とがある。前者はいわば真正なカタリであり、社会的規範性を有し、民間社会の神話としての役割を担っているものであったと考えられる。この点では、神話と民話の関係を問題にする視点と共に、近時用いられはじめた「神ガタリ」「昔ガタリ」の用語が、カタリの展開を追う上からは有効であろう。「昔話」が本格昔話と派生昔話を含む総体を包む用語だとしても、その本流としてのカタリの系統につながる古代社会における実体を、「昔話」の語で括りうるかどうか問題であるからである。